

調査出張報告書〔産業振興土木委員会〕

調査年月日	平成30年9月5日（水）	調査時間	13:10～16:30
調査先	七飯町役場、大沼国際交流プラザ及び道の駅なないろ・ななえ	実施場所	第1委員会室
説明者	坂田議長、関口議会事務局長 外	現地視察等	施設見学等

調査概要

1 調査目的

平成31年2月からスタートする自然・体験型観光の参考とするため、また広域的な観光地づくりの参考とするため、七飯町の取り組みについて調査を行った。

2 説明内容

七飯町は、函館市の北に位置する人口約2万9千人の町で、日本新三景に選定された大沼国定公園がある。日本の西洋式農法発祥の地であり、日本で最初に西洋りんごが栽培された町である。

七飯町を代表する観光地として大沼国定公園がある。大沼国定公園は3つの湖と駒ヶ岳を抱き、夏は乗馬体験・カヌー体験、冬はワカサギ釣り体験やスノーモービル体験などがあり、さまざまなアウトドア体験ができる。またラムサール条約の登録湿地でもある。大沼は以前から国際観光の取り組みが進んでおり、平成12年に大沼国際交流プラザをオープン、外国人観光客の多様化するニーズに対応し、レポートできる満足いく旅の提供に取り組んでいる。

平成28年3月には隣接する北斗市で北海道新幹線新函館北斗駅の開業があり、大きな転換期を迎えている。新函館北斗駅の近傍に平成30年3月にオープンした道の駅「なないろ・ななえ」を、観光客を迎える第一の観光拠点として位置づけ、大沼国定公園など道南地域の広域観光・交通情報提供を備えたゲートウェイ機能の確保と、町の魅力を最大限発揮することのできる情報提供施設を目指している。

北海道新幹線開業から2年が経過し、函館・道南の注目度が下がり、観光客が減少しており、その減少をどこまで食い止められるか、どれだけ観光客をふやすことができるのか、七飯町の今後の課題である。

3 質疑の概要

○ 宿泊施設のキャパシティについて

近隣に函館市という有名な観光地があるため、宿泊は函館市から順次埋まっていくのが現状で、2泊目を大沼で、という形がある。七飯町のみで宿泊客を呼ぶのは限界があり、広域での観光ルートの造成などに取り組んでおり、函館市との観光部門の職員交流を通じて情報共有も行っている。函館市の事業は、広く近隣の市町村に呼びかけられており、それに参加している。例えば函館市の方で自然をテーマにした観光ルートを紹介したいということがあり、七飯町、鹿部町、森町、北斗市を含めて、広く観光ルートの設定をしている。

駒ヶ岳を囲む、七飯町、鹿部町、森町は、環駒ヶ岳広域観光協議会を持ってい

る。協議会を通じて、各町に誘客するルートの設定が可能になっており、広域で観光客を呼び込んでいる。

新幹線の開業に伴って、北斗市が事務局になって、新幹線の沿線自治体の協議会を設置している。J R北海道と協力し、格安の周遊キップを販売して誘客に取り組んでいる。

○ 滞在型観光への取り組みについて

夏と冬の一大イベントということで、大沼湖水まつりがあるが、今年スカイランタンのLED版を導入した。宿泊客に対してスカイランタンをプレゼントして、そのイベントに参加できるようにする取り組みを行った。

体験型観光のメニューづくりを行っており、ランチと体験をセットにしたプラン等を毎年つくっている。経費の問題でPRが及ばない部分もあるが、いろんな視点を持って、商談会でプランを提示している。ニッチな層に訴求できるメニューを数多くつくることができていると思う。今年はグランピングにも着手した。民間事業者と常に意見交換しながら取り組んでいる。

○ インバウンドへの取り組みについて

インバウンドに関しては、七飯町が、というよりも民間事業者の取り組みが大きい。例えば北海道ローカル放送局のHTBは、ローカル番組としては視聴率が高く、北海道の魅力発信、アジア圏に対する番組製作を積極的に行っている。

北海道では観光誘致だけでなく、投資誘致にも取り組んでいる。アジア圏の富裕層から投資案件に対する投資を誘致し、経済のてこ入れをする。例えばニセコ、倶知安町は、オーストラリアの方が投資を行って魅力ある地域にしていた。北海道は門戸が広いと思う。

○ 地元産品を生かした取り組みについて

七飯町だけでできることは限られているので、近隣の市町村と協力している。七飯町は海に面していないが、北海道の魅力と言ったときに海産物がある。七飯町の道の駅も、近隣の海産物を扱っている。圏域として魅力を発信して相乗効果を出していこうとしている。

七飯町の規模であれば役所と民間の距離が近い。道の駅では、地元の方々がりんごを使ったパイを作ったり、知恵を出し合って地域の特産品・商品を品揃えしている。

4 調査の成果・委員会としての意見等

○ 函館市を中心とした、広域での市町村連携の取り組みが進んでいると感じた。函館市から広域観光ルートを発信するなど、具体的な取り組みが行われており、今後高知県で広域観光を進めるにあたっての参考になった。

○ 七飯町（人口約2万9千人）くらいの規模の市町村では、単独で観光振興等に取り組むことは難しく、広域での連携が必要不可欠であると感じた。高知県でも

同様と思われるので、小規模市町村への支援が必要である。

- 大沼国定公園の遊覧船でのガイドの説明がとてもわかりやすかった。30分程度の乗船にあわせて大沼国定公園の説明が行われ、これを起点に大沼国定公園の観光に入ることができる。大沼国定公園では国際交流プラザが観光案内所も行っており、観光に入る際の起点が重要であると感じた。
- 大沼国定公園は自然景観の美しさから、古くから自然体験型観光が盛んで、さまざまな体験プログラムがあった。ただ函館を起点に日帰りを楽しめることから七飯町における滞在型観光としての課題も感じた。高知県で来年2月からスタートする自然・体験型観光キャンペーンにおいても、広域で自然・体験を楽しんでもらい、滞在型観光に結びつける工夫が必要である。
- 七飯町では冬期の観光客数の落ち込みが課題となっているが、湖面凍結など寒さを観光資源として生かす工夫が感じられた。高知県の観光も同様に、冬場の落ち込みが課題となっているが、逆に暖かい気候を生かしたスポーツツーリズム等の取り組みを、幅広く展開していく必要性を感じた。
- 道の駅なないろ・ななえは、北海道新幹線の新函館北斗駅と大沼国定公園の間に位置しており、広々とした良い立地だった。平成30年3月にオープンしたばかりであるが、七飯町観光のゲートウェイの機能を担う、魅力的な施設だった。高知県でも道の駅を観光拠点として広域的な役割を担っている事例があるので、参考にしたい。

調査出張報告書〔産業振興土木委員会〕

調査年月日	平成30年9月6日（木）	調査時間	8:50～9:30
調査先	北海道坂本龍馬記念館	実施場所	館内
説明者	三輪館長	現地視察等	施設見学
調 査 概 要			
<p>1 調査目的</p> <p>現在開催中の「志国高知 幕末維新博」にかかる歴史資源の磨き上げの参考とするため、また高知県立坂本龍馬記念館などとの交流の可能性を探るため、北海道坂本龍馬記念館の取り組みについて調査を行った。</p>			
<p>2 説明内容</p> <p>幕末の志士坂本龍馬と北海道に渡った坂本家子孫の資料を展示する記念館であり、平成21年11月に開館した。</p> <p>龍馬自身は北海道の地に足を踏み入れることはできなかったが、北海道開拓を志しており、その遺志を継いで甥の坂本直寛が一族を引き連れて北海道に渡り、北海道開拓に足跡を残している。</p> <p>記念館では、坂本龍馬の等身大の肖像写真、肖像画、愛刀、ピストル、直筆書簡などを展示しており、ほかにも幕末に活躍した偉人の書や武具刀剣類がある。</p> <p>明治維新から150年、NHKで大河ドラマ「西郷どん」が放送されていることも受けて、西郷隆盛や勝海舟に関する史料計8点の特別展示も行っている。</p> <p>記念館向かいの函館龍馬公園内には、「蝦夷地の坂本龍馬像」が平成22年に建立された。</p>			
<p>3 調査の成果・委員会としての意見等</p> <ul style="list-style-type: none">○ 地震の後の停電中であつたにもかかわらず、非常に丁寧な説明をいただいた。停電を除き、地震による被害がないことも確認できた。○ まさに坂本龍馬ファンによってつくられた記念館だと感じた。北海道に坂本龍馬の魅力を伝える記念館があることを心強く感じた。同館と本県の龍馬記念館が連携することにより、相乗効果が望めるのではないか。○ 平成21年に記念館を開館し、平成22年には蝦夷地の坂本龍馬像を建立、NHKの大河ドラマにあわせた特別展示を行うなど、記念館の魅力を高める取り組みを行っている。函館市には特別史跡五稜郭もあることから、幕末の歴史を感じることできる施設として魅力的である。○ 「竜馬がゆく」をきっかけに龍馬ファンになったという館長の説明はわかりやすく、龍馬の魅力がよく伝わってきた。			